・何が「不適切」？　何が「悪い言い方」？　どう言えばいい？

★線引きをしようとしてもキリがありません。なぜか？　「子どもの脳、体の成長発達に合った育て方」に関する知識がはっきりしていないから。「何が適切か」を理解して、そのような保育、子育てを。【新刊】の役割は、「何がもっとも適切か」とその理由を保護者、保育者、社会に説明することです。

・「お皿ぴかぴか」「好き嫌いをなくす」は大事では？

★食事に「おなかがへった」「おいしかった」「おなかがいっぱい」以外の感情（ストレスやごほうびや罰）を付随させることは、将来にわたる問題につながりかねません（私たちおとなの多くが問題を持っているように）。また、そもそも０歳、１歳は「好き嫌い」の人たちではありません。この件はとても重要なので、【新刊】に詳しく書いています。

・園児の名前を呼び捨てする、あだ名で呼ぶのは？

★未就学児施設は公的な場所であり、職員にとっては仕事の場です（昔は「家族」だったのかもしれませんが）。おとな同士であっても、仕事や公的な場で呼び捨てやあだ名は使わないでしょう。子どもは「さん」「くん」、あるいは全員、「さん」。赤ちゃんは「ちゃん」でかまわないでしょうけれども。

　おとな同士でも、本人が「こう呼んでほしい」と言わない限り、ダメです。呼び捨ては力関係の上下そのもの。本人がいやがるあだ名は、いじめ。子どもはおとなに対して「それ、いやだ」という意思表明をできません。そして、丁寧に名前を呼ぶから、後の言葉も丁寧になるのです（逆もしかり）。

・おとなの声の大きさは？

★保育者が大きな声で呼びかける状況は、複数の子どもを一斉に動かそうとしている時です。このような声がけをしても子どもは動きませんから、結局、保育者はもっと大きな声になり、怒りがこもり…。複数の子どもを一斉に動かす保育は、そもそも子どもの脳や身体発達に合っていません（ここが、知識に基づく最大の変化です）。【新刊】

　まず、おとなは大きな声を出さないようにしてください。信頼関係ができていれば（ふだん怒鳴っていたら、信頼関係は作れません）、子どもは「なんだろう？」と耳を傾けます。これはおとな同士も同じで、怒鳴り合いは悪化するだけですから、意識的に声を小さくすることです。

・子どもが危険なことをしそうな時に大きな声を出したり、手を引っ張ったりするのは？

★これは当然、します。ビックリすれば「うわ！」と大きな声が出ますから。思わず手を引っ張れば、肘内障も起きます（はずれやすいようにできているので）。「こういうことはある」と４月、保護者に伝えておく、クラスや園庭に見守りカメラを付けておく、です。

　未満児のかみつき、ひっかきは、その子が反応する条件がたいていありますから、とっさに止める以前に、「この子は誰かが目の前に来ると」「誰かの手が出ると」等のパターンの理解と、パターンに基づいた予防を。【「気質」については新刊】＋「保育の安全」サイト→「コミュニケーション」→A-4、A-5

・他児にケガをさせそうな時、迷惑をかけている時にも優しく諭さなければ、「不適切」になるのか？善悪の判断を身につけさせるには、適切な叱責は必要ではないか？

★未就学児は、他児やおとなに危害を加えようと思って行動しているわけではありません（※）。まだ、おとなが考えるような「迷惑」や「危害」の因果関係がわかっていませんから。0歳から必要なのは、この因果関係を理解し、自分の感情を理解し、表現する道具、つまり「言葉を身につける」ことです。

言葉がなければ、因果関係（例：この子が持っているおもちゃを奪ったら、この子は自分をたたく）を理解できません。言葉がなければ「奪いとらないで、貸してって言おう」とも考えられません。言葉を言う練習をしていなければ、「貸して」とは言えません。**【新刊】**

これでおわかりの通り、必要なのは「優しく諭す」や「叱責」ではなく、冷静に因果関係を伝え、子どもが言葉を使えるようにしていくことです。おもちゃを奪った子どもにも、取られてたたいた子どもにも。叱責が「不適切」かどうかではなく、叱責には効果がないのです。**【新刊】**

※年長にはこのような子どもが稀にいますが、いわゆる「気になる子」以上ですから、わかります。

・行事の練習ができない、参加しない子どもがいる。どんな言葉かけをすればいいのか？

★これは私たちの**【新刊】**に山ほど根拠が書いてありますが、2022年、高山静子先生も『保育内容　5領域の展開』で解説なさっています。日本の未就学児保育・教育は「逆算＝小学校に上がるため」という考え方で作られてきたので、未就学児施設でも小学校のような行事をしてきた歴史があります。ですが、そもそも未就学児の脳は「そろって」「間違えずに」「同じ動作を」をする意味を理解しておらず、できません。私たち、今のおとなが子どもの頃に「できた」のは、当時のおとなが私たちを叱り、なだめすかし、「できるようにしたから」です。

こうしたことを保護者に伝えて、子育ても保育も子どもの成長発達に真の意味で意味のあるものにしていかなければ、子どもたちは十分に育ちませんし、先生たちが目にしている通り、「課題のある子」「グレーゾーンの子」が増えるばかりです。不可欠なのは、保護者の理解であり、保護者が子育ての柱になることです。【新刊】　が「子育て」を含んでいるのは、そのためです。

・支援が必要な子どもが増えている。どうしたら？

★これがまさに**【新刊】**の大きな柱なのですが、生まれた瞬間から保護者が赤ちゃんとやりとりをし、脳を育てなければ、自分で自分の感情をつかみ、自分の行動を必要な時に制御し、必要な時には表現する道具（言葉）とそのスキルは身につきません。これを集団の中ですることは非常に困難ですから、ほぼ保護者に任されます。

この重要性がはっきりしたのは、過去20年ぐらいです。昔のおとなは意識してこれをしていたわけではありません。何が違うか。2010年頃以降、デジタル機器が普及しておとなの注意が奪われ、子どもとのやりとりがどんどん減っている、ここが圧倒的に違うのです。

子どもが汚い言葉を使う、他の子どもや保育者に悪態をつくといったことも起きています。まず、「この子どもたちはこうした言葉しか持っていないのかもしれない」と考えてみてください。おとなのあなたも今や、なんでも「モヤモヤ」で済ませていませんか？　おとなの場合は、「モヤモヤ」と言

っている間に言葉を失っていくのですが、今の子どもたちはそもそも言葉を手に入れることができないのです。

・保護者に「スマホの害」を伝えるには？

★研究者たちも「スマホを使うこと自体がいけない」とは言っていません。子どもとおとなが一緒にタブレット等を使うことの効用は研究が続いています。「スマホを使うな」ではなく、「生まれた瞬間から赤ちゃんがどれほどおとなとやりとりをしているのか」というおもしろさを伝えることで、「スマホより、子どもとかかわるほうが楽しいですよ！」と。保護者（父親も、です）が０歳児の育ちをおもしろいと思い、かかわりが増えれば、結果的に保護者から赤ちゃんへのアタッチメントも強まり、その後の子ども育てにも良い影響となります。

・保護者に子どもの様子を伝えても、「家では大丈夫です」で終わってしまう

★家庭には、いたとしても数人の子どもしかいないのですから、園とは子どもの行動が違って当然です。また、保護者が抑圧していれば、子どもは家で静かにしているでしょう。家で抑圧（虐待等も）されているから園でもおとなの顔を見る子どももいますし、逆に、園で行動化する子どももいます。

　まずは、４月の段階でこれを伝えておいてください。そして、必要に応じて動画に撮って子どもの様子を伝えることです。**【新刊】**の冒頭にも、「何か気になることがあったら、すぐに支援を求めて！」と書きました。支援を求めることは「この子はダメ」という意味ではない、ここを社会が理解して、発達の（本当の）専門家を増やすことも必要です。

「保育の安全」サイト→「コミュニケーション」→A-3 の項目４

　そして、こうしたお子さんに保育者の手を取られることで、保育全体が崩壊します。ただ、もちろん、「みんなでいつも同じ活動を」という保育をしていたら、どんな子どももつらくなります。保育者の大変さも悪化します。保育自体を、子どもが選んで自分でする形に変えていくことは必須です。実践は**【新刊】**にまとめてあります。

・園でみんなで話をしたくても、時間がない

★時間があって、話をしたとして、年齢や経験の壁を越えた率直な議論ができますか？　それがこの文化そのものの問題です。そして、この問題を今の子どもたちに渡してはいけないのです。今の子どもたちは、年齢や経験の壁を越えて議論できなければならない。そうしなければ、世界で生きていくことはできません。

「自分にはできない」なのかもしれませんが、「ここで自分（たち）ができるようにならなければ、子どもを十分に保育することはできない。自分が、自分たちが今日から変わっていかなければ」です。